

- 1 報告地区：十勝地区
- 2 事例報告学校名：士幌町立士幌小学校
- 3 報告者職・氏名：校長 佐藤 育子
- 4 キーワード：社会に開かれた教育課程

1 はじめに

本校は明治41年に音更第七教育所東部教授場として創設以来、111年の歴史をもつ。士幌町の市街地に位置し、今年度は、全校児童229名、18学級（通常学級9学級、特別支援学級9学級）の学校である。

士幌町においては、児童数の減少による学校再編が進んでおり、今年度は近隣の小規模校3校を統合し、次年度、更に1校の統合を予定している。

本校の学校教育目標、「明るく、強い士幌の子ども」の実現に向け、目指す学校の姿を「笑顔で登校、笑顔で下校できる学校」とし、子ども、教職員、保護者・地域住民の笑顔があふれる学校づくりに努めている。

本稿では、「社会に開かれた教育課程」の「社会」を、子どもたちを取り巻いている空間軸の「社会」と、子どもたちが将来生きていく時間軸の「社会」の2方向で捉え、地域と連携した取組と中学校と連携した取組について報告する。



2 実践の概要

(1) 地域と連携した取組

地域の思いや願いを受けながら、地域の未来を担う子どもを育成するためには、子どもたちにふるさと士幌への誇りと愛着を育む「ふるさと教育」の充実を図ることが大切である。そのため、本校では、生活科や総合的な学習の時間を中心に、農協青年部や食品加工施設と連携した農作業体験や食品加工体験などを実施し、地域の基幹産業である農業についての理解を深める学習活動を行っている。

① 農協青年部と連携した「こどもアグリスクール」

第3学年が年4回、農協青年部が主催する「こどもアグリスクール」に参加し、馬鈴しょの種類や歴史、栽培方法、加工品などについて学ぶとともに、馬鈴しょの植え付けや収穫の体験、乳牛の搾乳体験



などの体験活動を行っている。子どもたちからは、

「じゃがいもってこんなに大きくなるの?!」といった驚きの声が聞かれるなど、地域の特産物や産業を実感を伴って理解する場となっている。また、授業の最後には、いもだんごやフライドポテトの試食も行われ、食品加工についての関心も高まっている。



② 食品加工施設と連携した「大地くんと学ぼう」

全学年が年1回、町の食品加工施設を活用し、バームクーヘンやクッキー、どら焼き、ドーナツ、ピザなど小麦粉を使った食品加工の学習を行っている。食品加工体験を通して、土幌町の産業の1つである小麦が、日常生活でどのように使われ、自分たちの生活の中で役立っているかを実感する機会となっている。また、普段はお店で買うことが多い食品の製造過程を知る機会にもなっている。



こうした体験を通して、土幌町の農業や食品加工についての興味・関心が高まり、地域理解が深まることを期待している。

(2) 中学校と連携した取組

子どもたちの学びが社会へ繋がっていくためには、義務教育終了段階の子どもを小学校の教員もイメージすることが大切である。そのため、小学校と中学校の教員が相互理解を深め、協働して学びをつないでいく必要がある。

土幌町では教育研究所が中心となり、授業交流や中学校教員の小学校での出前授業、小学校教員と中学校教員の交流座談会などの取組を行っている。

① 中学校教員による出前授業

中学校の教員が小学校第6学年を対象に、年に3回の出前授業を実施している。今年度は、土幌小学校で6月に算数と英語、11月に音楽、体育の授業を実施した。3回目は、中土幌小学校で実施する予定である。子どもたちにとっては、進学する中学校の授業の雰囲気を感じる機会であり、中学校の教員にとっては、入学する子どもたちの様子を知る貴重な機会となっている。



② 小学校教員と中学校教員の交流座談会

11月の出前授業の後、小学校教員と中学校教員の交流座談会を行っている。

卒業生の中学校での様子や、生徒指導上の課題、小学校で身に付けてほしいことなどを率直に話し合い、相互理解を深めている。小学校と中学校では文化が異なると言われることがあるが、小学校と中学校の違いを知り、その上で、各学校段階毎に、どのように学びをつないでいくかを考える機会となることを期待している。



3 おわりに

これらの実践は決して新しい実践ではない。これまでも大切であると言われ、実践してきたが、新学習指導要領の実施に当たり、「社会に開かれた教育課程」という視点から改めて捉え直したとき、新たな意義をもつものであると考えている。

今後は、これまでの実践のよさを大切にしながら、カリキュラム・マネジメントを機能させ、新たな時代に必要なものとしてブラッシュアップしていきたいと思う。